
怪物容器

liketogray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪物容器

【コード】

N3746D

【作者名】

like to gray

【あらすじ】

同姓愛・・・かも。あ、でも、ね！そんなにケイベツしないで見ていってよーってあらすじじゃねー？！

1・寒空の出会い。(前書き)

張り切ってどーぞ！

1・寒空の出会い。

12月23日

「父さん！車停めて！！」

叫んだのは、木原陸 私立空色高校1年。

彼は駅近くのマンションと本屋の間に座り込む『人』を見つけた。
丁度、父親と車でスポーツ用品店に行った帰りだった。

息子が急に大声を出したことに驚き、木原家の大黒柱は車を停めた。

木原圭介 眼鏡で痩せ型で背は低い。『大黒柱、主人、亭主』等の言葉が凄まじく似合わないタイプである。（陸がこの歳で父親を『親父』と呼べないのもその為である）

助手席に座っていた陸は急いでシートベルトを外し、車を飛び下りて『人』の元へ走った。

『人』 膝を抱えて座り込み、震えている。

ところどころ破れた、汚れたトレーナーとジーンズのズボンを身に付けていた。

左手にはブレスレットというのか、六望星の彫られた鎖が巻いてある。

髪はグシャグシャで長さもまばらである。一番長いところで肩にかかる程度であった。

ガリガリに痩せていて小さく、小学校中学年くらいに見える。

「姉さん……どうして……姉さん……姉さん……」

『人』はうつ向いて、地面にピントを合わせる事もなく、同じ言葉を今にも消えそうな声で呟いている。

今にもその呟きが途切れて、死んでしまいそうなくらいに弱っていた。

陸は何も言わずに『人』を抱き抱えた。

『人』はとても軽かった。

『人』は更に震える。

「離……て……離し……てえ……は……してえ……」

『人』は小さな声で訴えたが抵抗する力が無いらしく、陸に抱えあげられて車に乗せられた。

「父さん！此処からだと家より静香おばさんの家の方が近いよ！早く！おばさんなら絶対受け入れてくれるから！！」

「……わかった。」

「あらあ……陸くん……！！……その子、おばさん家に早く入れて！！」

水無静香 近所では『静香おばさん』の愛称で親しまれている。

53歳で大きな家に一人で暮らしている。

子供はいないが、夫は単身赴任で玩具会社の社長をしている。

誰にでも優しく、温かい人で、お金持ちではあるが誰にも妬まれる

事は無かった。

「エアコンを最強に」

「毛布持ってきて」

「飲み物・・・何か食べさせた方が良いかな」

『人』を優しく、温かい毛布が包む。

『人』も意識が徐々に戻ってくる。

「こつゆつ場合は・・・警察に連絡するべきか」

圭介は電話をとる。

「やめてっ・・・だめえ・・・けい・・・さつ・・・お願いします
ッ！俺を・・・このまま捨ててもいい！一生この家の奴隷にしても
いい・・・だから・・・あの家だけには・・・戻りたく・・・
ない・・・」

『人』は精一杯の声で訴えた。

警察に話されてしまったら、またあの家に戻る事になるかもしれない。

「なにか事情があるようね」

静香が優しく問いかける。

『人』は私情を全く話そうとはせず、それどころか先程より震えが増し、大きな目から大粒の涙をポロポロ流し始めた。

静香が涙を拭ってやろうとすると、

「嫌ッ！・・・怖い・・・怖い・・・ゴメンナサイ・・・
ブタナイデ・・・」

触れられることを極端に嫌がった。

陸が口を開いた。

「あの・・・この子と俺を・・・二人にしてくれませんか？この子、言語の割に精神状態が凄く幼い。多分、長期に渡る虐待か何かの原因だと思うんです。・・・俺に任せて下さい。」

大人二人は一瞬驚いたがすぐにそれを承諾し、部屋を出ていった。

陸はチャイルド・コールとゆうボランティアをしている。小学生から高校生の悩み相談などを電話で承るというものだ。

子供の心理は大人二人よりよほどわかつている。と、静香も圭介も判断したのだった。

陸は膝を抱えながら震えて泣き叫ぶ『人』を後ろからそっと抱き締めめた。

「嫌ッッ！！・・・怖い！・・・離して・・・怖いッッ・・・」

「大丈夫だよ・・・怖くない・・・」

「イヤッ・・・やだア・・・」

「大丈夫・・・あつたかいの・・・感じる？・・・安心して」

「ふえっ・・・イアア・・・ゲホッ・コホッッ！」

「・・・喉渴いてるんだね?・・・コレ飲んで・・・」

コップに用意された水を、そのままの体制で『人』の口まで運ぶ。

「・・・ケホツ・・・んやあつ・・・怖いよお・・・イヤアア!!」

『人』は暴れるだけで水を飲もうとはしなかった。

(口の中、凄く渴いてる・・・何日も飲まず食わずなのかも。哺乳瓶でもあれば無理矢理飲ませられるのに・・・無理矢理?)

陸の頭にあるアイデアが浮かぶ。

(・・・この歳の子にスルのか?・・・実際何歳だか分かんないし・・・でももう抱きついてる訳だから・・・)

陸は『人』を一端離した。

「大丈夫、毒とか入ってないよ?ほらっ」

陸はコップの水を口に含み、いきなり『人』の口頭部と腰に腕を回して、

「!!!・・・あんっ・・・んぐツ・・・んんっ!!」

己の唇と『人』のそれを重ねた。己の口内から

「人」の口内へ無理矢理水を押し流した。

『人』の顎を溢れた水が伝う。

「・・・良かった。飲んでくれて。」

陸は『人』の耳元で優しく囁いた。

『人』の震えが小さくなる。

「少し安心したかな？」

「・・・姉・・・さん、気持ちいい・・・あったかい・・・」

「そっか。気持ちいい？」

「・・・うん。・・・ゴメンナサイ。貴方が・・・姉さんみたい
に・・・あったかいから。ゴメンナサイ、もう少し・・・擦り寄っ
てもいいですか？」

あまりに大胆で恥ずかしいその言葉に、陸は少しだけ驚いた。

（きつとこの子は恥ずかしい言葉だと思ってないんだ・・・）

「いいよ。」

陸は腕にさつきよりも少し強く力を入れる。

「・・・ア・・・うくつ・・・ハア・・・」

「人」は自らもしがみつくように擦り寄った。声にならない吐息を吐きながら。

（なんか俺の方が恥ずかしくなるな・・・）

「俺は君に聞かなきゃいけないことが沢山あるよ。答えたくない質問には無理に答えなくていいから・・・できる?」

「うん・・・じゃあ、このまま質問シテ・・・クダサイ。あつたかい
ままが・・・いいデス・・・」

「わかった。じゃ、質問するよ?・・・君の名前は?」

優しく、『人』に問いかけていった。

1・寒空の出会い。(後書き)

はじめまして。宜しくお願いしあぐずツツ!!!!可哀想な悲劇の
ヒロインって格好良く見えますよね?そうゆう話を読むのは嫌い)
笑)でも書くのは好き。楽しつ・・・でも時間かかるね(泣)

2・水無烈也誕生。

「君の名前は？」

「なまえ？……………いっぱいあるの。」

「いっぱい？」

「……………うん。姉さんが俺を呼ぶ時と、兄さんが俺を呼ぶ時は違う名前なの。……………あ、兄さんの前では姉さんは兄さんが俺を呼ぶ名前と同じ名前で呼ぶんだけど……………。お母様とお父様は名前で呼んでくださらないの。」

「そう……………。じゃあ俺は君を何て呼べばいいかな？」

「……………うう……………好きなように、呼んでクダサイ。兄さんに呼ばれてた名前は……………兄さんの声、思い出すから怖いのだツ……………。でも姉さんから貰った名前も……………姉さん、思い、出し……………て……………寂しいよ……………姉……………さん……………独りにしないでエ！！」

陸は泣き叫ぶ『人』を強く抱き締める。

「ひゃあつ！……………う……………」

「ツツ大丈夫……………大丈夫だから。ね？」

「うめ……………んなさ……………い。」

「謝らなくていいよ。辛かったんだね。」

陸が続ける。

「じゃあ、烈也れつやっていうのはどう？漫画の主人公の名前なんだけどさ。格好良い名前だから。」

「烈也……はい。素敵な名前……。」

「気に入ってもらえた？俺の名前は木原陸。陸でいいよ。」

「陸……。」

「うんっ。じゃ、次のしつも……。」

「陸、俺は陸を信じてもいいの？……俺、駄目な子なんだ。生まれて来ちゃいけなかったんだって。」

「君の両親がそんなこと言ったの？そんなことないよ。信じて。君はフツウの男の子だよ。」

「違うツツ！俺……化物だから！……危ない……チカラ……
・持ってるから……陸はまだ知らないから、優しくしてくれ
てる……。」

烈也は再び震え始めた。

「陸がこのまま質問していったら、話さなきゃいけなくなるツツ。
そしたら俺のこと怖くなって……そしたらもう……ギョ

ツてしてくれなくなる。・・・怖いよお・・・独り・・・コワイ・・・
。。姉さん・・・もう傍にいないの。ギュッとして欲しいの。・・・
落ち着くの。人の感触とか・・・体温。」

「ゆっくり、ゆっくりでいいんだ。君が楽に話せる事から教えてく
れれば。・・・そうだな、烈也は何歳？」

「えと・・・15歳・・・だよ。12月1日が俺の誕生日なんだ
って、姉さん言ってた。」

陸の一つ下にあたる。

「びっくりだな・・・もっと小さいんだと思った。・・・あ、そう
だ。さつき男の子って言っちゃったけど・・・あってる・・・よ
ね？」

「・・・どつちかと言えば・・・男の子なの。」

「・・・それは、どうゆう意味？」

「性別が無いんです。・・・ゴメンナサイ・・・でも、生まれた
ときから、性器が無くて・・・。子宮とか無いけど・・・お、
おちんちんも・・・ついてないの・・・。」

陸は少し混乱した。

こんな人を見た事がなかったのだ。

男の子でも女の子でもなくて、それでいて見た目よりずっと歳が上。

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ！！・・・変な躰で・・・俺。気
持悪い？」

「違うよ！・・・ちょっと驚いただけ。不安にさせちゃったね。俺こそ、ごめん。」

「陸・・・優しい。俺・・・でも・・・俺は・・・“怪物容器”なんだよ？・・・怖いでしょ？俺のこと・・・陸はそれでも優しくしてくれる？」

「“怪物容器”って超能力者のことだよ？今はそんな差別用語使わないよ！超能力者が怖がられて差別を受けてたのは、もう昔の話だよ！！今じゃ多いから、超能力者って。うちのクラスにも5人位いるしね。」

「・・・か、階級は？」

「4人は下級だって。1人だけ中級がいるんだよ！珍しいでしょ？超能力者でも100分の1位しかないんだってね。・・・だから烈也も心配しないで。超能力者は今じゃもう、差別はほとんど受けないから。」

「違うの！！・・・俺の・・・これ！」

烈也は陸の腕の中から出て、左手につけている鎖を陸に見せた。

「それ、超能力を制御できない赤ちゃんとかがつける鎖だよね？・・・親にずっとつけさせられてたの？どんなにチカラの強い超能力者でも5歳を過ぎたら制御できるようになるはずだもんね。」

「違うツツ！・・・これ、保険・・・みたいなモノ。俺、制御はできるけど・・・ツヨイの、能力が・・・強すぎるの。」

「上級？・・・大丈夫。上級能力者でテレビに出てる人もいるし。怖くなんかないよ？・・・凄く珍しいだけで。」

「上級じゃないの・・・俺・・・最上級なん・・・だ。」

陸は思わず固まった。

最上級超能力者 上級能力者よりも遥かに上をいく能力の強さに、人々は恐怖し、十数年前までは、

『生まれ次第、発見され次第、即抹殺。』

の処置がなされていた。しかし、

『最上級超能力者も人だ。人権がある筈だ。』
という世論が広まり、その処置も無くなった。

が、今世界中に何人の最上級能力者が生きているのかなど、いまいち分かっておらず、その処置が無くなってから何人の最上級能力者が産まれたのかも政府は明らかにしていない。

「俺が生まれた時が丁度、最上級能力者の人権について揺れていた時代で、生まれて直ぐ俺は研究室に送られたの・・・。そこには俺ともう一人、最上級能力者がいたんだけど、俺が5歳になった時に二人とも親元に返されたの・・・。」

「そう・・・なんだ・・・正直、ちょっと怖いな、最上級超能力者は。でも、でも・・・君はやっぱりフツウの男の子だよ・・・。なんかね、烈也が怖いつて思えないんだ。だって、こんなにおつきいお目目で泣く子が化物な筈無いよ。」

陸は無邪気な少年のように笑った。
それから少し真剣な顔と優しい眼差しで烈也を見つめた。

「ねえ、烈也？・・・君は恐ろしいほど強いチカラを持っている。
だけど、制御する事だっっちゃんとできる。だから俺は、烈也の事、
怖くなんか無いよ。」

「陸・・・・・・・・」

ガチャ！

突然ドアが開く。

「キヤアツ！」

烈也は思わず陸に抱きつく。

「ごめん！びっくりさせちゃったかな？」

圭介と静香が入って来た。

「話は聞かせて貰いました。ごめんなさいね。盗み聞きなんてして、
良くなかったわよね。」

「話の続きは後にして、静香おばさんがお風呂を沸かしてくれたか
ら入りなさい。この先どうなるか分からないが今日はとりあえず・・・

「・

「圭介さん、良いのよ！・・・烈也君、今日から此処があなたのお家よ。」

「ふえっ……?」

「二階は自由に使っていていいわ。……宜しくね、烈也君。」

困惑する烈也。

陸が口を開く。

「静香おばさんはね、とつても優しい人だよ。大丈夫、信じて。」

静香が烈也に手を伸ばした。

「よろしくね、烈也君。」

烈也はその手をギュッと掴んだ。

静香は優しく微笑んだ。

「さあ立って！お風呂はあっちよ！」

静香が烈也の手を引っ張る。

陸は烈也の体を持ち上げた。

「今ね、母さんがスーパーで買い物をしているんだ。電話して下着とか買って来てもらうよ。」

圭介が言った。

「お風呂からあがったら、悪いんだけど私のスエット着ててね。用意しておくから。」

静香に言われるがまま、烈也は風呂に入る事になった。

風呂はとても大きかった。

小さな旅館並のサイズだ。

脱衣場には全身が映る鏡がある。

烈也は服を全て脱いだ後、ふとその鏡を見た。

烈也は鏡に映った自分の身体を見つめた。

骨と皮しかないような細い脚、股には男性の生殖器は無い。

アザだらけの腹、少しの膨らみも無い胸。

細い腕、傷とアザのある首、傷跡の残っている耳と頬、目尻が少しだけとがった円い目、まばらな長さの髪の毛……

(汚い……)

烈也は風呂場に入りシャワーを浴びた。

身体を伝って流れる水は茶色く濁っていた。

(陸、俺臭かったかな……?)

烈也は風呂場で一人になり、また自分の姉の事を思い出した。

(……姉さん……一緒にいたかったのに。俺……)

烈也はうずくまって、しばらく泣いていた。

その間もシャワーは烈也に降り注いぎ続けた。

優しい温かさで烈也を包んだ。
まるで陸のように。

同じ頃

「もしもし、母さん？急なんだが、女物のパンティーを買って来てくれないか？あ、子供用サイズの……へ？……ち、違う！勘違いだ！！母さぁん！！！！」

ツーツー……

電話が切られた。

(父さん、パンティーって……)

「父さん……俺がかけるよ。」

陸は圭介の右手からそつと携帯電話を取った。

「すまんが頼む……。」

圭介の『しまった』というような表情に、堪らず陸と静香は吹き出した。

圭介もつい笑った。

外はかなり冷えていた。

この部屋の中だけが、とても暖かった。

2・水無烈也誕生。(後書き)

漫画好きです。少年ジャンプとサンデーと。テニプリと魔王がキテ
る。それからSQ。罪か罰、最高WW

3. そして1日は終るけれど。

ガチャツ・・・

烈也は脱衣所のドアを開けた。

静香のスウェットは内側がモコモコしていて、下着無しで着ると肌に触れる感じがくすぐったくて烈也にとって少し不快だった。

「烈也君、ご飯にしましょう!」

テーブルには沢山のおかずが並び、既に陸と圭介が席についていた。

「烈也君にはお雑炊作ったからね。食べれそうならおかずも食べて欲しいけど・・・お腹壊すと困るから。」

「すみません、私達まで・・・」

「いいんですよ。さ、食べましょ!」

烈也は陸の隣に座り、雑炊をがつついて食べ始めた。たまにむせると、陸が背中を擦ってあげた。

皿の中の雑炊は一瞬にして烈也の胃袋に収まった。

烈也は申し訳なさそうに静香の顔を見た。

静香は烈也をまるで哀れむような、少し遠い目でずっと見ていた。

「・・・あら、ごめんなさい!嫌な目で見てたわね、私・・・。おか

わりね。沢山あるから、沢山食べてね。」

烈也の皿を取りあげ、静香は雑炊をつけた。

「はいどうぞ。」

「すみません……がつついて食べたりして……はしたなくて俺、3日ぐらいほとんど何も食べてなくて……。それに……こんなにちゃんとしたご飯、食べたこと無かったから……。」

「烈也君は何も悪くないわ。気にしないで食べて。」

「……ありがとうございます。」

烈也は腹いっぱい雑炊を食べた。温かい日本茶ももらい体が温まると烈也はうとうとし始めた。

ピンポンッ……

不意にドアのチャイムが鳴る。

うとうとしていた烈也は驚いてビクツと反応した。

「こんにちはー」

「あら、どうも。」

「母さん、少し遅くないか？」

「陸の着れなくなった洋服を探してたのよ。烈也君って着るものも無いんでしょう？サイズが合うかしら……。」

木原美奈子 陸の母であり、圭介の妻である。しっかり者で明るく、綺麗な顔立ちをしている。

烈也は陸の後ろからひよっこり顔を出し、美奈子を見た。

「こんばんは烈也君。陸のお母さんですっ!」

腰を少し曲げ、烈也と視線を平行にして合わせ、美奈子は挨拶した。

「・・・こんばん、は。」

「これ・・・サイズ合うか分からないけど、全部あげるから、着てみてね。」

美奈子は烈也に大きな紙袋を渡した。

烈也は片手で受け取ったが支えきれず、一旦床に置いてから両手で持った。

「あら、ありがとうございます。」

静香が礼を言った。

「・・・ありがとうございます。」

烈也も礼を言った。

「じゃあすみませんが、私たちは失礼します。烈也君のこと、今日は宜しく願います。」

「いいのよ。・・・私が面倒を見るわ。」

「じゃあね、烈也。明日また来るよ。」

「イヤッ！」

烈也が陸に後ろから抱きついた。

「烈也・・・・・・」

「陸君、陸君がもし大丈夫なら・・・・泊まっ行って行かない？その方が烈也君も安心するだろうし。」

「陸。明日は日曜日だし、泊めてもらったら？烈也君の為に。母さん、着替えとか歯ブラシとか持ってくるから。」

「父さんも賛成だな。」

「・・・・分かった。」

「静香おばさん、息子と烈也君を宜しくお願いします。」

「じゃあ直ぐ着替え用意して持ってくるから。」

二人は静香の家を後にした。

その後直ぐ陸は風呂に入った。

その間に美奈子が着替えを持ってきた。

烈也はその間ぼんやりとテレビを見ていた。

ガチャツ・・・

陸が脱衣所のドアを開ける。

「二階の一番手前の部屋にベッドがあるから。その隣に布団敷いていたわ。悪いんだけど、どっちか一人は布団で寝てね。」

静香が言った。

「烈也。二階、行こうか。」

陸が言った。

「おばさん、おやすみなさい。」

「おやすみなさい。」

「あ・・・オヤスミ・・・サイ。」

「ふふツ・・・おやすみなさい。」

静香は小さく笑った。

二人は二階のベッドがある部屋に上がった。

「電気は小さいの、つけておこうか。布団とベッド、どっちが良い？」

「・・・どっちでも大丈夫です。けど・・・もし良かったら、

一緒に……………」

「…………いいよ。狭くなければ。」

烈也と陸は二人でベッドに入った。烈也は横になり陸の方に向き、陸は仰向けで寝転がった。

「…………俺、まだ、頭がボーっとしてて…………俺…………助かったの？…………助かるの？」

「助かったんだよ…………今日はもう寝な？」

烈也はすすり泣き始めた。陸は体を烈也の方に向けた。

「泣くなよ……………」

2、3分で泣き疲れて烈也は眠りについた。

そして1日は終わるけれど、必ず終りにそれぞれの夜が来る

3. そして1日は終るけれど。(後書き)

誤字・脱字や文章表現など、少しずつ手直ししながら書いていきたいと思っています。指摘して下さると凄く嬉しいです。メッセージお待ちしております。

4・怖い夜の次の朝

「HEY, Danma!!!」

(・・・誰・・・・・・・・？・・・兄さん！？・・・ここは・・・兄さんの部屋！？)

烈也は高校生くらいの『男』に腕を捕まれ、強引に床に叩き付けられた。

「ほらっ!!!・・・よっ!!!」

『男』のかかところが勢い良く烈也の背中に落ちた。

(痛いッッ!!!)

「あー苛々する。ほらっ!!!」

更に『男』は烈也の背中を何度も蹴った。

(痛ッッ痛い痛い痛イ!!!!!!)

烈也の目に涙が浮かんだ。

「あ・・・・・・・・ふう、イヤッ・・・・・・・・痛いっ」

(やだ・・・・・・・・怖いよお)

「喋んじゃねえよ!!」

(なんで・・・俺はいつも・・・こんな痛い事されなきゃいけないの?どうして?)

『男』は烈也の左手首を踏みにじった。

左手首につけていた鎖が烈也の細く、白い手首に食い込んだ。

「あ!・・・やあ!!!!・・・痛い・・・踏まないでえ!!んんっ・・・グリグリしないでえ!!!!痛いよお!!ああああ!!!!はんっ・・・くっ」

(痛いよお!!手がとれちゃう!!!!・・・どうして、俺・・・)

烈也の左手は鎖との接触部分から鬱血し、赤く膨張した。接触部分は内出血を起こし赤紫色になった。

「うるさい。黙ってる」

「ひっ・・・ゴメンナサイ!・・・痛っっ!・・・ッッ・・・イッ
ああ・・・ダメっ」

「駄目?俺に口出ししてんの?」

『男』は烈也を睨みつけた。

烈也の表情が今まで以上に恐怖に染まった。

烈也の涙が耐え間無く流れる。

「ひっ！！違います！！好きなだけ蹴ってクダサイ・・・踏んでくだ・・・さい・・・兄さんの好きにしてください・・・」

「言われなくてもそうする。」

『男』は烈也の腹を蹴り始めた。

「っあ！！・・・っ！！おなかは・・・」

「ここがどうした？」

『男』は更に烈也の腹を数回蹴った。

「イツツ・・・うグっ・・・ん！」

「兄さんに蹴ってもらえて嬉しいだろ？兄さんのストレス解消のオモチャになれて幸せだろ？ああ？」

「・・・うつ・・・嬉しいです・・・兄さんのお役に立てるなら、もつと・・・ツツ！蹴って、殴って・・・うぐっ・・・この体を傷と痔だらけにして下さい。兄さんが体に痕を付けてくれるなんて・・・幸せです。・・・ああっ！！」

「ハハハツツ！！いいね！！上手く言えるようになったね。ご褒美！！！！」

『男』は烈也の腹を踏みにじった。

「ツアア！！！！！！イツツああ！！！！んっ・・・ゲホッ・・・う・あ・・・嬉・・・しい・・・嬉しいよお！！気持ち・・・イイ・・・」

・幸せですツツ!!!!・・・うアッ アツツ!!!!・・・」
バンツツ!!!!

凄まじい音が響いた。

『男』が先ほど以上の懇親の力で烈也の腹を蹴ったのだ。
烈也は意識が遠くなるのを感じながらぐったりした。

「へばるの早過ぎ。全然、苛々治まんねえ!!!」

カチャツ・・・ガチャンツ!!!!

『男』はドアの外に出ていった。

1分も経たない内に『男』は部屋に戻ってきた。
高校生くらいの『女』を引き連れて。

「兄さんツツ・・・やだよ!!!腰がまだ痛い・・・昨日もヤツたのに・・・無理ですツ!!!!」

『女』は烈也に気付いた。

「ジュリア!っ大丈夫!?!・・・ああ、兄さん、ここまでするなんて・・・ジュリアが死んじゃうよ!!!」

「なあ、お前それ俺に口聞く時の口調か?」

『男』は『女』の胸ぐらを掴んだ。

「調子に乗ってんじゃねえよ・・・」

「す、すみません……」

『男』は『女』をベッドに倒した。

『男』は『女』の服を脱がせ、体を撫で回し、胸を舐め、股の間に手を入れた。

「あ……イッツ……ハアハア」

(やめて兄さん!!!姉さんに酷いことしないでえ!!!……こんな……こんな見たく無いよお……)

烈也は『女』を助けるどころか立ち上がることも、『男』に聞こえるほど大きな声を出す事も出来なかった。

『男』は服を脱ぎ、『女』の顔に自分の性器をすりつけた。

「ハアハア……」

「ヤッ……んっ……」

烈也は堪らず、目をギョツと瞑った。

グチュグチュグチツ……グチャ……

「痛ああ……ひっ……んあっ……それは……ヤア!……はああん
っ!!!」

「ハア……ハアハアハア……」

グチャ……グチュグチュ……グチャアア……

嫌な音が烈也の耳に響いた。

(嫌アア!!こんな音聞きたくないよお・・・やめてよ!止めてえ!
!)

烈也は耳を塞いだ。

「ああんっ!・・・ヤア・・・ひゃあアア!!!」

『女』の高い声だけが烈也の耳の奥に響いた。

「やめ・・・て」

烈也の声は誰の耳にも入らなかった。

「やめ・・・て。兄さん!」

烈也は目を開けた。

目の前には陸の顔があった。

「大丈夫だよ。・・・おはよう。怖い夢を見たんだね。・・・起こしてあげようか迷ったんだけど、寝ないと体が持たないと思ったから・・・。」

陸は床に膝をついて自分のパジャマの袖で烈也の涙を拭いていた。
陸のパジャマの袖は濡れて色が濃くなつた部分が半楕円を描きなが

ら肘の方へ5cm程伸びていた。

「陸、ごめん。陸のパジャマびしょびしょ……」

「気にしなくていいよ。それより、どんな夢見てたの？怖い夢って話したく無いだろうけど、喋っちゃえば楽になる時もあるよ?」

「うん……でも……」

「あのさ、テレビで上級超能力者がやってたやつできない?ほら、映像を他人の脳に直接入れるってやつ。」

「テレパシー?」

「そうソレ!……やっぱり超能力使うのは嫌?」

「ううん。大丈夫だけど……気持ち悪い夢だし、痛いし……陸に嫌な思いさせちゃうから。」

「でも烈也はその夢、見たんでしょ?……共有しよ?辛い事。俺と半分にしよ?烈也に元気になって欲しいから……さ。」

「……ごめんね、陸。俺も陸に頼りたい……辛いの中から助けて欲しい。陸……ありがとう。」

烈也は左手の鎖を外し、陸の額に自分のそれを当てた。

現実の時間では一瞬だったが、陸は烈也の見た夢 烈也の過去を体験した。

「陸、ごめん！・・・大丈夫だった？」

陸の目からは涙が流れ続けていた。

「りっ・・・く？」

バサッ！

陸は烈也を力いっぱい抱き締めた。

「烈也！また嫌な夢を見たり、辛いこと思い出したら全部俺に伝える！！・・・こんなの・・・お前一人で耐えるの、辛すぎるだろ・・・」

涙声で叫ぶように陸が言った。

「陸・・・ごめっ」

「謝んな！！ずっと、ずっと俺が守ってやるから！！絶対、もう・・・こんな事・・・絶対、絶対！」

「陸っ、ありがとう。」

烈也は目を閉じて泣いた。

陸の腕に強く締め付けられ、肺が苦しく、体は痛かったが、烈也には嬉しさの方が勝っていて離れられなかった。

（陸・・・陸ッッ・・・あつたかいよオ・・・ありがとっ、ありが
とっ。）

朝日がやけに暖かった。

4・怖い夜の次の朝 (後書き)

遅くなりました。中途半端にエログロイ……。感想、メッセ
ジ、頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3746d/>

怪物容器

2010年10月8日21時32分発行